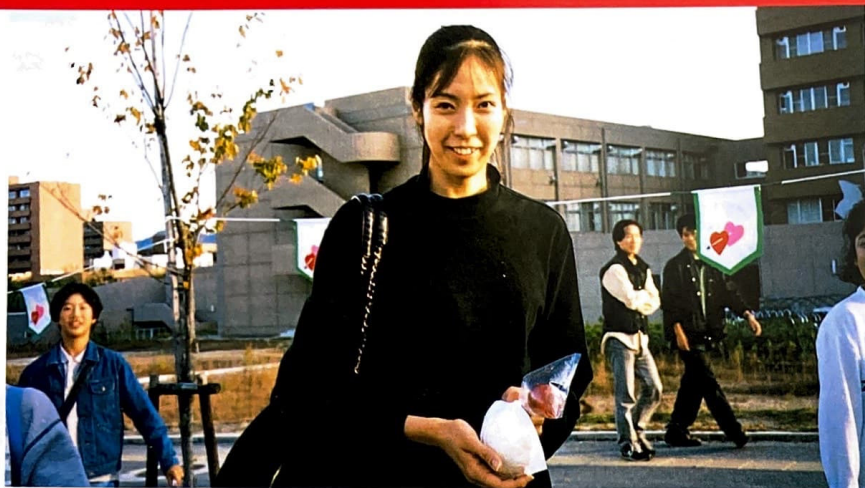


第45回
広島大学

大学祭



↑東洋紡・大林来る（手に注目！）



↑07出店 エストマゴ



フリーマーケット→
鼓動。新しい持ち主のもとへ。

11月2日から3日間
総科周辺で大学祭が行われた。
今年のテーマは“鼓動”



←08の店出し
サンドイッチマン
出動!!



↑サタあんだぎー
& シークワサー

原料 →



↑恒例、フォークゲリラ出沒



Contents

巻頭言..... p 6

「教養的教育改革の大渦の中で」

桑田 正秀 (学務委員会委員長)

カリキュラム改革とその行方 p 7

ここが変わる！～平成9年度以降のカリキュラム～

パッケージ別科目担当教官の声

学生の選択～改革に対してどう臨むのか～



「総合科学」の最先端 p 22

～総合科学研究プロジェクト～

「はたして植物は音楽を聴いているのか？」

ー生命活動を統御する新奇な空間伝達シグナルー

上領 達之 (生体行動科学コース教授)

「本能と学習・記憶の制御システムの多角的解析」

筒井 和義 (生体行動科学コース教授)

激動のオリキャン会議 p 32

スタッフ募集前会議考

参加者エッセイ

「愚痴」近藤 雅晃・山田 幸博

「オリキャン」中島 賢人

「スタッフ募集前の話し合いについて」吉川 愛沙

「オリキャンの私なりの否定的考察」小笠原鉄平

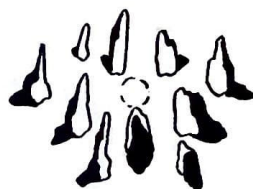
社会からの声 p 28

「安全で住み良い賀茂学園都市を目指して」

今本 清潔 (西条警察署長)

より良い授業を目指して p 30

「授業改善の方向性とは」市橋 勝 (社会科学コース講師)



研究室紹介

<文系>..... p 18

村田晃嗣研究室 (地域文化コース)

石倉康次研究室 (社会科学コース)

古東哲明研究室 (人間文化コース)

伊藤詔子研究室 (外国語コース)

<理系>..... p 36

中越信和研究室 (自然環境研究コース)

水田義弘研究室 (数理情報科学コース)

渡邊一雄研究室 (物質生命科学コース)

浦 光博研究室 (生体行動科学コース)

エッセイ

「どうせこの世は、そんなとこ 第二話」

柏戸 義道 (事務長補佐) p 16

「『黒べえ』と『スペル星人』

加藤 徹 (人間文化コース講師) p 27

「『鬼女蘭』

本田 計一 (自然環境研究コース教授) p 40

「物干し竿の話」

渡邊 忠信 (社会科学コース3年) p 41

「勉強する事についての考察」

河合慎一郎 (自然環境研究コース2年) p 42

「時間」

有村 大士 (1年) p 43



賞をもらって p 44

「大学生第3回懸賞論文ー21世紀のエネルギー・環境問題を考えるーに入選して」

市本 秀雄 (生物圏科学研究科博士過程前期2年)

初公開！飛翔ができるまで p 50

お初にお目にかかりますー新任教官紹介ー p 45

人事移動のお知らせ p 47

読者からの手紙 p 48

編集後記 p 52

伝言板・募集 p 54

グラビア1

第45回広島大学大学祭

グラビア2

総科の四季

教養的教育改革の大渦の中で

桑 田 正 秀 (学務委員会委員長)

平成9年度の新入生から、新カリキュラムの下での教養的教育が始まります。今回の改革で、教養的教育は「共通科目」と「一般科目」に区分されます。「共通科目」は大学での学問研究や社会で活動していくうえで基本となる能力の習得を目指し、「一般科目」は履修の選択が学生各自または各学部学科などに委ねられます。今回の改革の目玉は、共通科目の中では「教養ゼミ」、また一般科目では「パッケージ別科目」です。ここに至った経緯とその内容については、

本学部の朝倉尚教授が「広大フォーラム」^註の中で分かり易く解説されていますのでご参照下さい。ここでは、実際に教養的教育検討委員会特別委員会とカリキュラム編成専門委員会(カリ専)、またその下にある個々の実務的作業を行うワーキンググループ(WG)に参画しての感想を、主に述べたいと思います。

私は昨年1月からカリ専と幾つかのWGに出席しています。また、4月からは特別委員会にも出席しています。こ

れらの委員会では、教養的教育の理念と目標などの検討に引き続き、今年度からは、それらの具体案を検討しています。そして、来年度からはそれらを実際に実施しなければなりません。委員会などの雰囲気は、今までの総合科学部に対する苦言などもありますが、概して大変好意的です。我々もその好意に甘んじてばかりではいけません。それに応えていかなければなりません。教養的教育は全学で行い、総合科学部もその中の1部局であります。しかし、教養的教育の総単位数50単位程度の内、40単位程度は総合科学部で、責任をもって開講しなければならない責務は、重く受けとめなければなりません。



特別委員会は月2回弱、カリ専は毎週の開催日程です。また、各WGは随時開催されています。これだけの開催回数ですが、全体的にみて、物事の決定が複雑になり、時間がかかるようになった感じがします。今までは、総合科学部内だけの調整で済んでいたことも、それを行った後、改めて全学の委員会などに提案し承認を得なければなりません。教養的教育の実施体制が全学に移管される過渡期であることが大きな原因かもしれません。

今回に限りませんが、幾つもの委員会などで実質的な役割を担っておられる若い教官には頭が下がります。しかし、それはやはり異常な事態という他ありません。本当に申し訳なく思っています。適宜に分担して、特に若い教官への過度の負担は出来るだけ少なくしていかなければなりません。

また、事務の方々にも本当にお世話になっています。通常、幾つもの検討事項や実務に関する事項が同時進行しています。それらをてきぱきと

こなされます。彼らがいなければ物事が全く進みません。本当に感謝しています。

来年度からの教養的教育の実施までには、まだまだ多くの困難なことも出てくることと思いますが、教職員の方々の皆さまのご協力と、学生諸君のご理解のほど宜しくお願い致します。

註：1996年10月25日発行の「広大フォーラム」28期4号(No.331)で、朝倉尚教授(教養的教育検討委員会特別委員会カリキュラム編成専門委員会専門委員長)が詳しく解説をされています。

カリキュラム改革 と その行方

平成6年度、広島大学は総合移転にともなって暫定的なカリキュラム改革を実施した。その際、教養的教育の理念・目標、学部教育との関連を曖昧にしたまま、卒業要件単位数の減少を教養的教育にシワ寄せしたため、十分な教育を行う事ができなかった。それとともに、生涯教育に対する社会的要請・統合移転にともなう学部間協力の必要性などが言われるようになっていく。そこで、すでに実施された高校教育カリキュラムの改革に年度を合わせるかたちで、平成9年度に教養的教育のカリキュラム改革が実施される事になった。



ここが変わる！

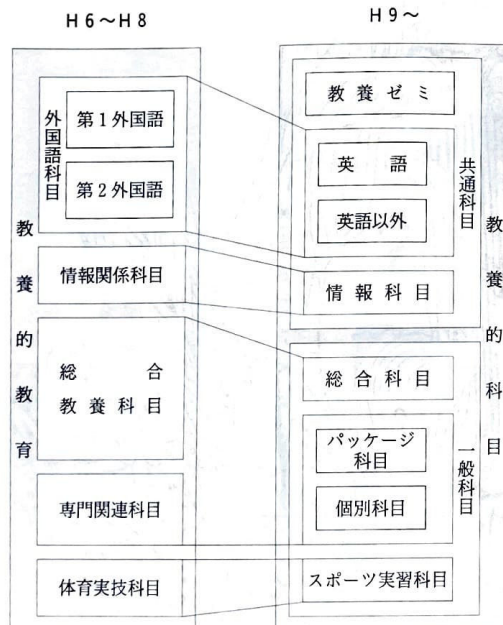
～平成9年度以降のカリキュラム～

今回の改革は「各学部の専門的教育との一貫性・調和性に配慮し、専門に対しての前専門性と非専門性、及び学際性・総合性を柱とした」教養的教育の改革と唱われている。その中身を見ていく事にしよう。

まず右下の図を見て欲しい。今までは、それぞれの科目が何をするのがよく分からない部分があった。それが、今回の改革では、各科目で何をのが明確になり、区分が理解しやすい形になっている。具体的には、全学（主には総合科学部）で担当する教養的教育と各学部で担当する専門的教育に分けられ、それぞれがさらにいくつか分類されている。今回の改革では、教養的教育の部分が改革され、図でみるように教養的教育科目が共通科目と一般科目の2つに大分されている。

共通科目は文字どおり全学の学生に共通して必修となる科目の事で、専門分野で勉強したり、社会で活動していくのに必要な能力を身につける目的で行われる。卒業後も必要となる能力を身につけさせるだけあって、外国語と情報の2つの教育センターが設立されるのをはじめ、大がかりな改革が行われた。また平成8年度に総合科学部で試行された教養ゼミという少し毛色の変わった科目も、来年度から全学で必修となる。

一般科目はコースや個人に選択の任されている科目で、授業科目そのものはそれほど目新しいものではない。だが何といっても今回の目玉であるパッケージ別科目が含まれており、科目そのものの内容はさほど変わってなくても、その履修方法に大きな変革がなされた。具体的には、1つの理念に対して様々な見方（人間・価値、社会・世界、自然の各視角）を提供する科目がいくつかのパッケージにまとめられて開講され、平成9年度以降の入学学生はの中から1つを選択し、履修する。また、それ以外にも個別科目として様々な科目が開講されており、今までのように個人の興味や必要に応じて履修することができる。



それでは具体的にそれぞれの科目はどのように変わったのだろうか。すでに総合科学部生には馴染み深い総合科目とほとんど変更点のないスポーツ実習科目を除いた教養的教育の内容と、新しく設立される情報教育研究センターと外国語教育研究センターについて詳しくみてみよう。



教養ゼミ

「受験ボケ」して入学してくる学生に、大学で自主的な学習を行う姿勢・能力を身につけさせる為の、1年次生を対象にしたゼミ形式の必修授業。過保護すぎるのではないかという意見もあり、大いに賛否の分かれる科目ではある。平成8年度総合科学部入学学生を対象に試行的に開設されていたものを、全学に拡大して行う事になった。

外国語科目

1：英語

「何で勉強せなあかんの？」と中学の頃から言われ続けてきたこの科目、ここ広島大学でも来年度から必修となる。ちなみに前述の問に対する広島大学の公式見解は、英語は「国際化社会におけるコミュニケーションの基盤となる」かららしい。

具体的には、1年次に技能別英語Ⅰが必修となり、1年次から必要に応じた科目選択（リスニング・リーディング・ライティング・スピーキング）が可能になる。2年次以降はこの能力をさらに伸ばす（技能別英語Ⅱ）か、英語圏の文化理解（総合英語）を目指すかで、どちらかの科目を選択することになる。これまでより複雑になるため、時間割編成で担当教官は悲鳴をあげている。

(履修パターン)

(開講科目)

- I 初修外国語の世界
- II 初級外国語：
 - a 週2コマ
 - b 週1コマ
- III
- IV 中級外国語

- I+III
- ☆ IIIのみ
- ◇ II+IV
- ◎ III+III

情報科目

平成6年度からの情報教育は西条移転にともなう移行措置であり、履修制限等不満の多い内容だった。（総合科学部ではこの3年間だけ情報科目が必修でなかった。）今年からは、情報教育研究センターも設立され、より基本的で実用的な「導入情報科目（講義系と実習系）」が開講される。またセンターの設立によって、学生が自由にコンピューターに触れる機会も増える事になる。

2：第2外国語

英語以上に「何で勉強せなあかんの？」と思っている人も多いのではないだろうか。大学側によると、「英語以外の言語を学ぶことによる異文化への接触」と「必要に応じて学習するための基礎学力の習得」というのが、上の疑問に対する答えらしい。

大きな変更点としてまず挙げられるのは、「異文化との接触」を実現するために「初修外国語の世界」という、技能よりも文化背景の教育を重視した科目ができたことである。また、個人の興味に応じて履修できるように、科目区分・履修パターンががらりと変わった。（左図参照）

もちろんこのようなパターン化は必修部分の事で、更に勉強したい人には上級コースや特別演習も用意されている。かつ、第3、第4…外国語をとることも個人の自由である。

一般科目

1: パッケージ別科目

今回のカリキュラム改革の目玉商品。体系的かつ学際的というある意味で相反する2つの概念の統合への果敢な挑戦、という事になるのだろう。

要するに、ただ何となく授業を選んで単位だけ揃えて終わってしまう事のないように、今までバラ売りされていた教養科目の内、同じ問題に違った方法でアプローチしている授業科目のいくつかを袋詰めされ、まとめて売りに出されるという事。新入生はいくつかのパッケージの中から1つを選択し、人間・価値の視角、社会・世界の視角、自然の視角という3つの視角に分類された授業科目の中から、各視角毎に2つ選択する事になる。

外国語教育センター

国際化・情報化が進むなか、実用的な外国語の運用能力を高めるための外国語教育を全学で支えるために設立された。目的としては、授業外学習のための場の提供、外国語教育の方法の研究・開発、共通科目としての外国語科目の企画・立案・実施の管理の3点があげられている。

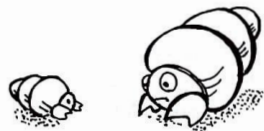
学生にとって、直接関係するのは、学生研究室であったJ101教室が、実習室として自由に利用できるようになることである。実習室には、コンピュータ、ビデオ、LLカセット、海外衛星受信施設を設置した自学自習用のスペースが用意され、これらを利用して自由に学習ができる。また、長期休暇中には、授業にとらわれないコース（TOEFL対策等）を開設するほか、授業期間中でも、授業の補習的な学習プログラムを利用した学習ができるようになる。

教養ゼミで自主的な勉強の仕方を身につけさせて専門に備え、パッケージ別科目で学問の総合性を教える。08以前生の受けた教養的教育と比較すると、この改革で随分と大学の面倒見が良くなったといえるかもしれない。むしろ教養ゼミなどは、面倒見がよすぎる、大学生に対してそこまでする必要があるのか、という批判の声さえ聞かれる。しかし、受験戦争の影響などで入学してくる学生の性格は変化しており、また社会における大学の位置づけも変わってきているのも事実である。そういった学生に対して「前専門性」「非専門性」「学際性・総合性」を身につけさせるには、非常に優れたカリキュラムだといえるのではなからうか。実際の授業が始まる前にカリキュラムのようないわゆるハード面からのみ、この改革を評価する事もできないが結果に期待の持てる改革のように思う。

2: 個別科目

専門に必要な知識を得たり、個人の知的好奇心を満足させるための科目で、学部・学科が指定した科目は「基礎科目」と呼ばれる。

基礎科目は専門に必要とされる知識を得る事を目的としている。それ以外の科目はこれまでの教養科目のようなもので、個人の興味に従って履修する事ができる。また、パッケージ別科目で開講された科目と同じ授業科目も開講されており、所属パッケージに関わらず履修する事ができる。



情報教育研究センター

情報教育に関する改革の一環として、西図書館2階に情報教育研究センターが設立される。これは機能的には情報処理センターと同じであるが、教養的教育に必要な台数を確保するための補充となる（90台）。また、このセンターが西図書館に設置されるのは、学生が授業で利用されていない時間帯を利用して、気軽に情報機器を利用できる環境を整える為であるという。

第06・K安調査員の裏情報

今回取材を進める中で、我々は偶然ある人物に出会った。彼の話は、言ってみれば改革の裏事情だったのだが、その表舞台だけを追っていた我々にとって、実に衝撃的なものであった。内容の真偽は定かではないが、このまま飛翔編集室でXファイル化してしまうにはあまりにも惜しいと考え、掲載に踏み切るものである。

▶ 改革の「不可避」性は何か ◀

そもそもなんで今改革するのか？どこ見たって91年の大学設置基準の大綱化って話が出てくる。と言うかそれしか出てないんだけど。大綱化ってのは、早い話が、それまでの設置基準をゆるくして、大学ごとの個性を出せるように、って事だ。で、これには、学部教育の弾力化（一般/専門科目区分の廃止）、大学院強化、生涯学習への対応、研究・教育施設の充実なんかの目標が挙げられてる。

ここで疑問が2つ出てくる。なんで文部省が大学設置基準を改正したのか。なんでそれが大学改革に結びつくのか。設置基準がゆるくなったからって、即、改革せにゃならんって事にはならないでしょう。「なんで」というのは、改革を「しなければいけない」事情は何かってことだよ。

▶ 改革の「静かなるドン」——大綱化◀

まず文部省の事情の方だ。何よりも大きいのは、まあ国の財政難ってことなんだろうね。つまり、大学のリストラと言うか、ある程度自由競争させて、勝ち残ったものにだけ金を出す。大枠で言ってるのは、要するにそういう事なんだよ。

一方、大学側としても、これから18歳人口がどんどん減っていく訳だし、社会人入学の拡充なんかを本気で考えていかなきゃならない。つまり生涯学習への対応だ。改革しなきゃ生き残れないのは明白だろう。国立の場合はつぶすってわけにはいかんけど。そのかわりもっとあからさまに、陰湿というか……ま、それはいいか。

しかも、新基準では具体的な改革の方向性まで示してくれてる。大学の個性などと言いつつ。例えば教育カリキュラムを体系的に編成とか、専門に加えて豊かな人間性を養う教養にも配慮せよとか。だから今、教養教育改革（+大学院改革）だ。それからさっき教育研究施設の充実って触れたけど、そこで情報処理、語学施設はなるべく備えよと言って。今度の広大な改革の方向そのものだろう？

▶ 「おかみ向け」改革の実情
——恐怖の大学評価◀

もっとも、そういう事じゃまだ改革の動機にはならないと俺は思うけど。91年の改正では、カリキュラム編成の自由を与えるとともに、とんでもない事やらかさないように、常に自己評価しろって事も言ってる。決め手はそれでしょう。義務ではないけど、やらないではいられないわな、「お前んとは大学としての努力を怠っている」とか言われて予算削られたらたまらんもね。

つまり、改革しないでボーっとしてたら予算削られる。下手に個性的な改革したら予算削られる。となると「文部省の言う通りに」改革せざるを得ないじゃないか。91年の新設置基準から最近の文部省ホームページまで、見たらわかるよ。今の大学改革でよく聞くようなキーワードは全部そこに埋められてるから。

▶ 改革を利用して学べ！遊べ！◀

まあ、大学ってのは社会的要請を無視する訳にはいかんし（お金出してもらうんだから）、文部省はそれも踏まえて大綱化したんだから、言いなりが悪いって言うんじゃないよ。でも今の様子を見ると、改革が文部省向けであって、学生向けじゃないってのは感じるよね。

例えば外国語と情報のセンターができるでしょ。あれって文部省の意向に沿ってるから、多分予算とか下りやすいんだろうね。でも全学生に使えるような数そろわないじゃない、コンピュータとか。すると授業では実習無しの講義が多くなったり。空き時間には自由に使えるんだけど、あまり宣伝をしない、学生にとっては不親切って事になるんだよ。

大学の自己点検も、報告書出してんだけど学生の目の届くところに置かないでしょう。学生も含めて大学なのにな。まあ、そんなもん利用するかどうかは学生次第だとも言えるんだけど、時折頭くるくらい学生を無視してると思う時があるよね。でも学生の方も、改革の時機を利用して何か要求するくらい賢くならにゃ、やっぱ。

パッケージ別科目担当教官の声

今回の改革を教官はどのように感じているのだろうか。

来年度、実際にパッケージ別科目を担当する3人の教官に感想の執筆を依頼した。

カリキュラム改革について思う

坂田 省吾（生体行動科学コース助教）

突然、カリキュラム改革に対する感想を書いて欲しいと頼まれた。読者が手にするのが4月頃だという。原稿は12月はじめまでに欲しいということで、現在の情報を元につつらと感想を述べたい。これはまさにホットな話題なので、原稿を書いているときと4月では捉え方が大幅に変わっているかもしれないことを承知の上で読んでいただきたい。あくまでも私個人が担当する授業について、かなり偏った見方であると断った上で感想を述べさせていただくことにした。

カリキュラム改革の最も大きな変更は、その責任母体が全学の教養的教育委員会に変わることであろう。これまでは一般教育科目から教養的教育科目と名前が変わっても、その実施主体が総合科学部で、時間割編成および担当教官の配置もすべて総合科学部の責任においてなされていた。それが全学に移管され、担当教官の大多数は総合科学部であっても、一担当教官としては、その責任母体から命ぜられるままに自由度の少ない状態の中でやらざるを得ない状態になる。共通科目としての「外国語」や「情報科目」の導入も新しい点であるが、カリキュラムの中での最も大きな変更点はパッケージ科目の新設であろう。私は「知の根源」のパッケージで「脳と行動」、「認知と学習」の2つを担当することになった。従来からもそうであるが、改革が行われる度に個人的な負担が増えるように感じるの

は私だけの被害妄想であろうか？負担云々はさておき、内容的な変化は企画立案の段階としては評価してもよいものであろう。「学問はすべて同じ」という大きな枠組みから各パッケージの目指すものとして、多少絞った看板が掲げられている。個人的には「知の根源」は好きである。実験科学と哲学の融合のような小気味よい響きがある。たぶんこれは実際に授業が開始される前のわくわくとした幻想であろうか…。総合科学部は常に夢を追いかけている。その姿勢は好きだし、私自身もそうありたいと願う。しかし今の総合科学部は夢を追いつけるあまり、夢に追いかけられる立場に立たされてしまっただけで、夢の中に浸ってそれを楽しむ余裕がない。昔の大学教官はいい意味での「暇人」の代名詞であったように思うが、現在は大きな組織の中の「歯車」にしかすぎないような感覚がある。たぶん私にもっと能力があれば「暇人」で通すことができるのであろうが、充電する時間がないように感じる今日この頃である。

正直なところ、今は良いも悪いも判断するものを持っていない。パッケージの理念について、すべての教官がそれぞれの見地から討議する。きっと学問的に楽しいことに違いない。これはある意味では総合科学部が創設以来目指してきたことでもある。今はただ来るべきものに対してワクワクする気持ちを楽しむだけである。

大学教員改革渡世

品川 哲彦（人間文化コース助教）

私が常勤の大学教師になったのは88年、勤務校は単科医大でした。91年の大綱化を受けて前任校でも教養課程の改編に携わりましたが、争点はつまるところ教養的教育は専門的教育に収斂するのか、専門以外の視野の拡大にあるのかでした。広大な教養的教育の目標でいえば、前専門性か非専門性かです。前

任校で感じたのは、改革案には教員が大学時代に受けた教養的教育に対する評価が反映するという。会議で、第二外国語など不要と息まく先生には、ああこの人はドイツ語で苦しんだのだと思い、医者にも人文科学は必要と主張する先生には、この人は若い頃心動かす本を読んだのだと思い、改革には人間喜劇の面があります。93年に広大に移りました

が、単科医大と違いはあれ、非専門をどう評価するかという論点は変わりません。教員が看過しやすいのは、学生はまだ何の専門家でもないということ。学生はとりあえず何かの専門家になって社会に入り込まなくてはいいので前専門の即効性を評価しがちです。広い視野とか年とるとわかるといっても説得力が足りません。非専門を評価するには知的余裕が要ります。知的能力とは申しません。専門だけにしか興味をもたない優秀な人はいます。ただし、知的能力が高いほど知的余裕も増えることもたしかで、これは予備校講師時代の経験ですが、同じジョークをいっても成績の悪いクラスは受けない。笑えないほど目前の課題で手一杯なのです。今回の改革で

もいわゆる超難関校ほど非専門を重んじているようです。知的余裕は創造的な立案能力に通じるでしょうし、優秀でもそれを欠く人材は示された案を理解し遂行する受け身の立場に立つでしょう。広大の改革案も『広大フォーラム』332号座談会で申しましたようにパッケージ別科目を始め非専門への広がりに配慮しています。ただ、教室の収容能力など万やむをえぬ事情もあって履修方法が細分化し、また内外の大学の改革の長所をとり入れるのに急で、遊びがないようにみえます。そこで、学生、教員ともども改革への対応に追われ、創造性の開発とはかけ離れた受動的な態度が蔓延するのでは、と思いついておしまいが、一抹の不安もあります。

カリキュラム改革について思うこと

浜渦 哲雄（社会科学コース教授）

私は4年前に教員になったばかりで、カリキュラム改革に至る過程が十分に理解できていないので、そんなものかと思ってみんなについて行く努力をしている。

教養的教育の一部パッケージ化、教養ゼミ、総合科目の3つが今回の改革の目玉である。パッケージ化は教養の科目を学生にバランスよく学習させることを狙いとしている。教養科目をビタミンにたとえるならば、AばかりとらないでA、B、Cバランスよく摂取し、できたらD、Eもとってもらおうというものである。

個人的な意見を言うならば、教養的教育の学習をなぜ1、2年に集中しなければならないか疑問である。教養教育は4年間のうちに必要性を感じれば学習してよいし、必要なければ専門中心の学習でよいはずである。

教養ゼミは学生のニーズとうまく合えば大学での学習を軌道に乗せる役割を果たせようが、未経験なのでしばらくは試行錯誤を続けなければならないであろう。学生の気質や関心が変わるので、毎年、どんなことをテーマにとりあげるか苦労しそうだ。専門ゼミだと学生の関心が分かっているから、その分野の資料を準備し、一緒に学習する楽しみがある。教養ゼミは参加する学生が決まり、希望を聞

いて次の週から始めねばならないので、こちらの押しつけになる可能性がある。

教養ゼミに新聞の読み方のようなものを作ったらどうだろうか。社会人として活躍するためには新聞を読むことが不可欠であり、その訓練は学生の時からしておいた方がよい。文章の書き方についても同じことがいえる。

総合科目は必要だろうが、どうしても動員できる教員の研究テーマによる制約を受ける。毎年、学生にアンケートを行い、どんなテーマの総合科目に学生が興味を持っているかを調べた上で、それに沿う総合科目を開講できれば一番理想的であろう。ただ、大学院国際協力研究科の経験からしても、学生のニーズと教員の研究テーマがうまく合った総合科目を組むのは大変である。



当然の事ではあるが、この改革にあまり関わっていない教官も多い。だがそういった教官も来年度からの授業を担当するのである。この改革で教官側の負担は確かに増えるし、また新しい事を始める不安もあろう。だが、どんなにカリキュラムというハード面が充実しても、教官に教養的教育に対する理解がなければ伝わるものも伝わらない。改革のソフト面である教官の姿勢もこの改革の成否を握る鍵だといってよいだろう。

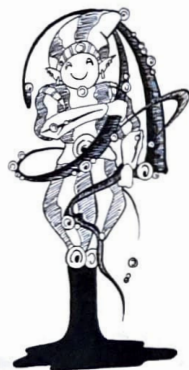
学生の選択

～改革に対してどう臨むのか～

平成9年度からこの改革に従ったカリキュラムで授業がおこなわれる事になる。このシステムが実際に機能するかどうかは、授業を受ける側の学生の姿勢によるところが大きいだろう。

◆教養ってなに？

そもそもこの改革、学生の預かりしらぬ所で決まったような感じがする。確かに08以前生の人間は大部分、改革の影響をそれほど受けない。そういう意味で学生の預かり知らぬ所ではあるわけだが、そうでなくとも大方の学生は教養的教育自体に無関心である。何故だろうか？それは教養的教育というものの意義を学生がいまいち実感できない為ではないか。



例えば、大学で何を勉強したいかが決まっている学生にとっては、それ以外の分野の勉強はやや億劫になる。それなら何故総科にきたのかと言われるかも知れない。だが、無味乾燥な受験勉強を経験してきた学生の中には「これぞ勉強だ！」と感じられるような専門分野に触れてみたいと思う人もいだろう。勿論そういう学生が多いとは言わない。むしろ大学を、会社にはいるための1ステップとして捉えている人の方が多いのではないだろうか。だが結局そういう人にとっての教養的教育は、本人達の意識している以上の時間の無駄にはならないか。そういった学生にとっては専門科目も教養科目も、卒業要件単位として差はない。だが、「非専門性」「総合性・学際性」は授業を受ければ後から勝手についてくるものでもないだろう。「この分野がこんな所であんな分野とつながっている」という発見をするには、それを見逃さない観察力が必要ではないだろうか。

◆面倒見はいいが…

そのような問題に対する解決策として、今回の改革は行われたのだろう。授業を詰め合わせてパッケージとして与えれば、学生が授業同士の関連を考える負担を少なくできる。全ての学生に「非専門性」や「総合性」を身に付けさせようという、非常に面倒見のいい改革であるといえる。

だがこのような制度ができる事と、それがうまく機能する事は別問題である。いくら授業をパッケージ化して与えても、学生がその意味を理解し、関連を意識しながら講義を聞かなければただの履修制限になってしまうのではないか。総合科学部で平成8年度入学生を対象に行われた教養ゼミにしてもそうだった。教養ゼミを単位数の面からみて「割に合わない授業」だと感じていた学生はいたし、そういう学生に大学側が望む「自主的に学ぶ態度」が身についたかは疑問である。最も教養ゼミを必要とする学生が、最も教養ゼミを軽視するというのも皮肉なものである。

◆ソフトの重み

結局この改革の成否は学生の意識次第なのである。教養ゼミでみられたような矛盾は教養的教育全般に渡って言える事かもしれない。また先ほど述べたように、教官の意識という物もこの改革の効果に大きく関わってくる。そういったソフト面の問題を大学側がどう克服していくか。その点については始まってみない事にはなんとも言えない。

大学の望む物を身に付けるだけが教養ではないのではないか。むしろ自分が必要と思える物を自力で（制度がどうであれ）身に付ける力量が持てれば、それこそが教養的教育の理念に合うのではないだろうか。

◇見えない溝

教養的教育の3本柱は「前専門性」「非専門性」「総合性・学際性」である。しかし、学生が大学で得たいと思うものと大学が学生に身に付けさせようとするものは、必ずしも同じではない。こんな物いらねーよ、と啖呵を切る学生も少ないだろうが、そうだ、この授業で非専門を身に付けてやろう、と思う学生ばかりでもない。

学生のやる気がなくなったという意見をよく耳にする。確かに「専門だの非専門だのはどうでもいい、単位として卒業していい会社にはいればそれでいい」、と思っている学生は結構いるだろう。大学をいわゆる就職予備校として捉える見方である。もちろんこのような考えを快く思っていない人は多いが、一方で大学の大量化が進む中、大学という物の捉え方にも色々あっていいのでは、と容認する立場もある。教養的教育に対しても同じ疑問を投げかける事ができる。今回の改革で確かに教養的教育の理念という物ははっきりした。さらにパッケージ別科目と教養ゼミというシステムを作り上げて、大げさにいえばレールまで引いてくれている。しかし、いったん広島大学に入学したからには、この大学の教育方針に従わなければならないのだろうか？もし学生がやりたい物を持っていれば、そんなシステムなど「どうでもいい」のではないだろうか。



◇脱線のすずめ

それは「言うが易し…」かもしれない。大学側の用意してくれたメニューに従うよりもずっと負担は大きいだろうし、結局なにも得るところがないかもしれない。だが、例えば自分の興味の有る歌手が育った国の文化を勉強する。たとえ専門となら関係なく、自分の好奇心を満足させるだけの事であっても、それも教養の一つの形だといえるのではないか。学生がもっと食欲に、理念もシステムも無視して、いや逆に利用して何かを得る教養的教育があってもいいだろう。

この改革を特集するにあたって、編集委員同士で何度も記事内容についての議論を重ねてきたが、その内容は主にソフト面についての事が多かった。それは1つにはやはり改革の最も重要な部分がソフト面であると思えたためであるし、またもう一つにはソフト面がまだ見えていない部分だという為でもある。システムというハード面は出来つつあり、調べる事ができた。だが、ソフト面は実際に始まってみなければ何とも言える物ではない。逆にこれからどのようにでも削っていける部分であると言うことができるだろう。我々の能力不足から改革を完全に描きとるには至っていないが、この画龍に睛を与えるのは当事者一人一人ではないだろうか？

(文責：学生編集委員)



どうせこの世は、そんなとこ 第二話

柏戸 義道 (事務長補佐)

前号で学生諸君向けに、その昔小生が山奥の禅寺へ籠ったとき和尚から拝聴した話を紹介したところ、意外にも「もう少し紹介して欲しい」との要望があった。抹香臭い話は若者には受けまいと思っていたので少々驚いたが、まあ「来る者は拒まず」で、いま一つ紹介することにする。この度も和尚の語り口そのままに、何も足さず何も引かず、ウィスキーではないが「モルツ100%」で行く。

「柏戸さん、お勉強の方はいかがかの…またお邪魔をしに来ましたわい。今宵は雑宝蔵經に出てくる「無財の七施」の話でもしましょうかのお。字のごとく「金が無うてもできる七つの施し」のことで、「顔施・眼施・言施・心施・身施・床座施・房舎施」をいいます。「施し」というと、何か金持ちが困った人に金や物を与えるようなことと考える人が多いようじゃが、それはチト考え違いじゃ。

仏教では、「慈悲」を説いておるが、「慈」は人によるこびを与えること、「悲」は人の悲しみを取り除くことをいう。じゃから、「いつくしみとあわれみの心を持って人に接し、慈悲の説くところを具現する行い」を「施し」というのであって、これを行う者と受ける者との間に身分の上下も無ければ、貧富の差もなく、また、必ずしも金品を伴う行いに限るものでもない。金が無うてもできる施しの代表選手を挙げたのが「無財の七施」じゃ。お釈迦さんの教えには、数字がよう出てくるが、これは、ワシらのような学問をしとらん者にも、ちいとでも解り易いよう、覚え易いようにとの、お気持ちじゃ。じゃから、教えを写す坊さんの筆も自ずと平易になる。世間には、とかく難しい文章を書くことが立派であることのように思う者もおるが、誰にでも解る言葉で、易しい文章を書いて欲しいものじゃ。さて、順番に行くと、優しい顔、暖かい眼差しで人に接すれば、これすなわち「顔施」、「眼施」となる。人の表情の中で、笑顔ほど素晴らしいものはない。優しいまなざしもまた、相手の心を温める。口をへの字に曲げて、ひがんだような目付きで、「この世の不平不満、一手に引き受け候」というような顔をするものではない。はたの者がたまらん。特に一家の主や役所のお偉いさん方は気をつけることじゃ。柏戸さんもそうになったら気をつけなされ。仏頂面で役所へ出勤して、まわりの者から「多分、ゆうべ夫婦喧嘩でもして奥さんにコテンコテンにやられたんじゃろう、あの顔は…」などと言われたんじゃ目も当てられませんぞ…ワッハッハッハ。

次に「言施」じゃが、言葉の力は偉大なもので、その場その場にふさわしい使い方をしたいものじゃ。この間、三原でバスに乗ったら、女の子が可愛らしい声で『ありがとうございました』と言うて降りて行ったが、気持ちのいいもんですのお。ワシは目が見えんが、どうでも降りてから、お辞儀の一つもしたることじゃろうて…。あの一言が、気を張って運転しとる運転手にはなによりの「言施」となる。こんな話もある。とある結婚式の披露宴が花婿宅の座敷であった。悪いことに花嫁のお腹にガスがたまった。しばらく我慢しておったが、やがて便所に立とうと思うて腰を浮かせた拍子に、プーと大きな音が出てしまった。近くにおった小姑がこれをひどうなじた。その夜、花嫁の姿が見えんので皆で探したところ、便所の裏手で首をくくっておったという。たかがオナラ一つでも、辛辣な言葉を浴びせれば、時と場合によっては人も死ぬ。花嫁の気持ちを察して、優しい言葉の一つも掛けてやっておれば…と情けない思いじゃ。「心施」は、きれいな心で誠意を持って人と接することじゃ。心に汚れがなければ、邪見（物事を誤って認識すること）に陥ることがないから、無用な恐れや不安を招くこともなく、いつも晴れ晴れとしていて、まわりの人といさかいを起こすこともない。こんな人と相対しておると、こちらの方まで清々しい気持ちになる。



「身施」とは、礼儀正しい立ち居振る舞いで人に接することじゃ。あの三原でバスに乗っていった女の子などは、きつと行儀も良いことじゃろう。勉強も大事じゃろうが、子供のうちから正しい躰をしておけば、後は放っておいても大丈夫じゃと思うが、どうじゃろう。

つぎに「床座施」は、他人に席を譲ること、乗り物の座席に限ることではない。ワシらの若い頃、冬の寒い日などには、修行の合間に兄弟弟子達と焚火をしたもんじゃが、5～6人の兄弟子が先に場を取っておると入り難いもんじゃった。そんなとき『こっちへ来んか、ええ火じゃ、早う来んか』と、場所を空けてくれたりしたときは、ありがたいもんじゃった。最近は大學生でも列車に乗るときなぞ我れ先に、タタターと駆け込んで席を取り、疲れたお年寄りが目の前におっても、狸寝入りを決め込むか、素知らぬ顔でおるらしいですのお…。己もやがては年寄りになるんじゃが…。

さておしまいの「房舎施」は、人を泊めてあげることじゃ。あばら屋でも、良い布団がのうても良い。こんな話を聞いたことがある。あの山頭火が流浪の果てに、四国の松山で粗末な借家に住んでおった。心配した友人が尋ねて行ったところ、達者でおったので、早速、真夜中まで手土産の酒を酌み交わし、積もる話に花を咲かせた。さて、寝る段になったが、汚い煎餅布団が一組しか無かった。宿屋へ行くにも時刻が時刻だけにどうにもならん。と、山頭火が煎餅布団を敷きながら『どうぞ、どうぞ、私は慣れておりますので…』と言うなり、壁を背にして座禅を組んだまま寝はじめた。晩秋の頃で、すきま風が身にしみる夜じゃったそう。ありがたく行為を受け、自分一人が布団に寝かせてもらうたが、朝、目が覚めてふと見ると、山頭火が寄り掛かっておった壁のところが朽て穴が空いておった。その瞬間、その友人は愕然とした。山頭火は己の背中ですきま風を防いでいたのじゃ。ジーンと熱いものが込み上げてきた。どんなに分厚い高級な布団よりも、あの煎餅布団が有り難く、山頭火に後光がさして見えた、と後日述懐しておられたそうじゃ。そうじゃろう、そうじゃろう。

小生、この話ほど解り易く、同時に実行し難いものはない、と今でも思っている。いうなれば、「知るは易く、行ふは難し」の典型であろう。



やれ、他愛もないことを長々としゃべったが、この「無財の七施」の要諦は「施しは心」ということじゃ。決して金品の多寡の問題ではない。謹んで「心」を込めて行い、これを受ける側も、慎んで、相手の「心」をいただくことじゃ。夏の真っ盛りの托鉢の折などに、轡くちやのお婆さんが『お暑うございませう、何もありませんが、どうぞお休みなさい』と言うて縁側で出してくれる一杯の冷えた麦茶は、お金持ちの豪勢な客間で良い着物を着た奥さんが「振る舞い顔」で出す紅茶とケーキよりもずっとうまう、甘露の味がする。これは、出された「モノ」を飲むのではなく、「心」を飲むからじゃ。「心」がこもってあれば、キュウリやなすの漬物だけのおかずの麦ご飯でも、噛めばやがて味が出てくる。これも相手の「心」を食べるからじゃ。

この山奥じゃから、柏戸さんにもろくな食事も出せんでおるが、婆さんが「柏戸さんは何をお出ししても、きれいに平らげてくださるんで、安心です」と喜んでいました。まあ、婆さんの「心」を精出して食べてやってくだされ。この寺へ来てはどうに瘦せたとおって、ご両親に申し訳けないでお。やれ、またまた、長居をしましたのお。では、ごゆっくりとおやすみなされ。]

おしまい